The International Association for Integration, Dignity, and Economic Advancement

IDEAジャパン

ニュースレター

ハンセン病患者・快復者や、すべての人々の尊厳の確立を目指して

2010年　1月20日発行　8号

初心にかえって

理事長　　森元美代治

新年早々、全国的な厳しい寒波に見舞われ、大雪などによる災害や交通事故が多発していますが、皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

日ごろ講演活動、ハンセン病資料館案内、全生園フィールドワーク、海外交流等に忙殺されて、本号の発行が遅れたことをお詫び申し上げます。

2004年8月5日に産声をあげたIDEAジャパンは、早や6年目に入りました。その間、手探り状態で取り組んでまいりましたが、皆様のご支援によりインド、ネパール、フィリピン、タイ、中国等のハンセン病の子供たちの奨学資金や生活改善資金を助成するなど、一歩一歩前進することができました。しかし、ハンセン病の世界を見渡せば、IDEAジャパンが果たさなければならないことがたくさんございます。今年は、理事一同初心にかえって努力する所存です。一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

中国のハンセン病の現状

昨年の世界的な金融危機に直面して、いち早く50兆円を超える大々的なてこ入れを行なった中国政府は、今やアメリカに次いで、世界経済の牽引役を果たすまでに至っています。ところが、55の少数民族や600を超えるハンセン病コロニー（快復村）等はその恩恵に浴することなく、ほぼ野放し状態です。年間のハンセン病新発患者は約1400人といわれていますが、どこまで正確かは分かりません。現在、コロニーには約2万人が生活していますが、無医村が多く、手足の傷の手当て等、医療や看護、介護は皆無といってよく、僅かな年金と細々とした農作業等による自立を強いられています。

JIA（ジャー、家）とQIAO(チャオ、橋)の活動

FIWC（Friends International Working Camp 国際青年労働奉仕会）の中国キャンプにはじめて参加した早大生の原田燎太郎君は、広東省にあるハンセン病コロニーの嶺后村（リンホウ村）の悲惨な状況に衝撃を受け、10年前大学卒業と同時にリンホウ村に住み込んで、村人たちのケアーをし始めたのです。看護、介護に無知だった彼は香港の看護師たちに教わったりして、ハンセン病特有の足せん孔症（足の裏の万年傷）を治したりしていました。私もその現場に居合わせて驚嘆し、日本から包帯やガーゼなど送ったこともあります。彼は一人ではどうにも埒が明かないと地元の教員養成大学の学生たちにボランテイアを呼びかけましたが、ハンセン病に対する知識の乏しい大学では感染を恐れて、参加したのはたった二人だけでした。その一人が後に奥さんとなる葵潔珊（ジェーシャン）さんでした。現在、1歳半の女児にも恵まれ、その名を嶺后（リンホウ）とするなど、ご夫婦のハンセン病問題に対する取り組みや情熱は並ではありません。彼らの活動は地域社会にも浸透し、理解され、今では村人たちもショッピングや外出を自由に楽しんでいます。

全生園のバザーに参加した同志社女子高校の生徒さんたち。園内のお年寄りの人気者だ／09年11月3日

さらに彼らは625のコロニーの所在地の大学に呼びかけ、韓国、日本、中国の学生たちによるJIAというNGOを立ち上げ、現在、3000人の会員による広範囲なボランテイア活動を行なっています。

4年前、早稲田大学にQIAO（チャオ、橋）という会が結成され、日本と中国のハンセン病問題の架け橋になろうと、休み毎に隊を組んで中国各地の快復村のインフラ整備

や多岐にわたるボランテイア活動をしています。チャオのメンバーには多くの大学の学生が加わり、アルバイトで旅費や滞在費を作って、現地の JIA と協働して活動しています。彼らの思いは今や中国に限らず、インドやインドネシアあるいは世界中のハンセン病村の活動へ広がろうとしています。IDEA ジャパンは、若い人たちの活動を応援しています。

IDEA ネパールとの国際交流

昨年 3 月、わが夫婦は IDEA ネパールを訪問しました。13 年前のネパールと比べて、ハンセン病事情がどのように変わったか、確かめたかったからです。

カトマンドウ郊外にあるコカナハンセン病療養所を訪ねましたが、13 年前とほとんど変わらない劣悪な生活環境に失望を禁じ得ませんでした。療養所で生まれた赤ちゃんや小さな子供たちが数名いました。ドイツやオランダのキリスト教団体の授産施設で、快復者の青年たちと近くの村の青年たちが協働で家具作りに励んでいました。嬉しかったのは、10 年前に全生園の麦の会で作ったレンガ舗装道路が、車椅子の人たちや多くの入所者に利用されていたことです。

次に訪問したのは、ネパール第二の都市ポカラです。IDEA ネパール副会長のパルバッティさんと IDEA ジャパンの奨学生のバサンタさんが待っていてくれました。バサンタさんは山間部の出身で家も貧しく、パルバッティさんの家に下宿しながら通学していました。高校卒業の国家試験にも合格し、次はナースの資格取得に励むそうです。IDEA ジャパンはナースになるまでの助成はしたいと約束しました。

国立グリーンパチア病院にはハンセン病患者や快復者たちと他の疾病の患者たちが共生していますが、トラブルもなく病院運営がなされていました。事務長さんによると、ネパールでは一昨年は 4000 人の新しいハンセン病の患者が見つかっているそうですが、実際にはその数倍の潜伏患者がいるとのことでした。

今回の訪問で、ネパールにも学校に通えないハンセン病の子供が大勢いて、IDEA ジャパンがしなければならないことが沢山あるということを実感しました。

IDEA と私

理事　柴田良平

2002 年 2 月、作家冬敏之氏の葬儀の席で、村上絢子さんに「IDEA の国際ハンセン病女性会議がアメリカでありますが、ご夫婦で行きませんか？」と誘っていただきました。私の IDEA との出会いはそのときから始まりました。その前年（2001 年）ニューヨーク市で起きた同時テロ事件で延期されていた国際ハンセン病女性会議が、その年の 6 月初旬、ニューヨーク州セネカフォールズで開催されることになっていました。家内と相談し、その場でご返事し、同行させていただきました。

会議が開かれた所は、アメリカの歴史に輝く、世界最初の女性の権利宣言が発せられた土地でもあり、「平等な正義」「平等な機会」「平等な尊厳」を掲げる小都市でした。そこはまた、自ら奴隷の子として生まれ、奴隷解放のために命をかけたハリエット・タブマンの隠れ家が残る聖地でした。

IDEA がここに本拠を置き、タブマンの理念と重ね合わせ、世界のハンセン病への差別・人権侵害が残る理不尽な社会の在り方を糺し、ハンセン病回復者が国境を超えて「平等な正義・機会・尊厳」がかなえられる時代を築こうとする理想を掲げて活動している深い奥行きを知りました。私にとっては、初めての世界の回復者との交流でしたが、共通の苦しみを背負って生きてきた者同士ですから、百年来の友のように、民族や人種を超えての交流に我を忘れました。

帰国後、IDEA ジャパンの結成と同時に会員として参加させてもらいました。

顧みて、ハンセン病の発病以来、私が歩んだ道程は、40 年前の社会復帰後も、差別と貧窮の狭間を夢中で歩き続けてきたと言えます。その中で、「ハンセン病に罹った不幸とあわせて、この国に生まれた不幸（国賠裁判での法廷証言）」の経験を告白し、ハンセン病国賠裁判勝利によって、その不幸を乗り超えて、今を生きています。

しかし世界的にはハンセン病は、アジア、アフリカ、ラテンアメリカなどの発展途上国では、新発患者が続いています。まだ日本は解決しなければならない多くの課題を抱えていますが、IDEA の理念を踏まえ、世界の志を同じくする人びとと力を合わせ、私たちの役割を果たしたいと思います。

クリオン島（フィリピン）から感謝の手紙

無事卒業しました！

ジャナ・マエ・サントシダル

IDEA ジャパンの皆様に心から感謝申し上げます。私と家族が直面していた重荷（＊）を取り除き、私の人生の夢を叶える手助けをしてくださいました。私は教師になりたいのです。そのためには卒業後も、別の学校へ通わなければならないのですが、どうぞそのチャンスを与えてください。

皆様のお力添えに感謝を込めて

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ジャナさんの母親は快復者ですが、父親は健常者で漁師でした。両親の夢は娘を教師にすることで、二人で一生懸命働いていたのですが、ジャナさんが３年生の時、嵐に遭って、父親は漁に出たまま行方不明になってしまいました。（＊）勉学を続けることが困難になった時、IDEA ジャパンの奨学金によって、2009 年３月、無事にクリオン島のロヨラ・カレッジを卒業することができました。

写真は、卒業式のジャナさん

目の治療を受けられました！

クリオン島には眼科医がいないので、副作用が繰り返されたことと高齢化によって、回復者たちは目の障害が進み、白内障になっていました。クリオン・サニタリウム病院は、IDEA ジャパンの寄付金を使って、眼科治療、白内障手術、薬剤提供ができました。

09 年 1 月

うれしいクリスマスプレゼント

IDEA ジャパンからの生活改善資金の一部を使って、クリスマスパーティーで、食べ物やお菓子のプレゼントをいただきました。同じ島に住んでいながら、普段会えなかった人たちと会えたし、楽しいひとときを過ごせました。

心のしこりから解き放たれて

～６７年ぶりの墓参り～

理事　　村上絢子

昨年 10 月、真宗大谷派のグループと一緒に、プライベートに台湾のハンセン病療養所楽生院を訪問したとき、沖縄から金城幸子さん（68 歳、IDEA ジャパン会員）も参加していて、思いがけない再会を喜び合いました。幸子さんの訪問の目的は、67 年前に楽生院で亡くなった母と弟の供養でした。

幸子さんの両親は、戦前ハンセン病と診断されて沖縄から星塚敬愛園に収容されました。すでに妊娠していた母親は強制堕胎を拒否し、夫婦そろって敬愛園から脱走し、熊本へ逃げました。そこで幸子さんの兄と幸子さんが生まれたのです。

いったん沖縄に戻ったあと、1942 年、日本の植民地だった台湾へ一家で渡りました。病状が悪化した母親が楽生院に入所したので、乳飲み子だった幸子さんは兄と一緒に沖縄の祖母の元へ送り返されました。

父親は別の女性と再婚し、兄は漁師のもとへ年季奉公に出され、幸子さんは養母に預けられ、一家は離散。養母に大事に育てられたものの、成長するにつれて幸子さんは「自分は生みの親に捨てられた」と思い込み、母親を恨み、憎み続けていたと言います。

ところが 25 年ほど前、台湾の楽生院で母親と同室で、最後を看取ってくれた ” おばさん ” と愛楽園で偶然知り合って、母の様子を知ることになりました。母親は楽生院に入れられ、子どもたちと引き離されたことで精神に異常を来たしてしまいました。子どもたちがひもじい思いをしているのではないかと、プロミンの注射器入れの箱にご飯を詰めて、子どもたちに食べさせるのだと、門まで行っては、連れ戻されていたそうです。赤ん坊を産み落としたのにも気づかず、25 歳で亡くなりました。

台湾で一人ぼっちになった母親を思いやれるようになったのは、幸子さん自身子どもを持ち、自分の人生と母親の人生を重ね合わせて、母親の苦しみと自分たちへの愛情ががわかったからだと言います。

私が楽生院へ行くとき、何度か幸子さんを誘ったのですが、講演活動で忙しい幸子さんの日程の調整がつかず、若いころのお母さんの写真を託されました。その写真と「よしこ」という名前を頼りに、楽生院で幸子さんの母を知っている人を探しました。同時期に楽生院に入所していた雪花さんという、貴婦人のような女性を探し当てたのですが、雪花さんの記憶に「よしこ」は残っていませんでした。

母の面影を求めて、雪花さん（左）と金城幸子さん
／09 年 10 月 8 日

楽生院での法要当日の朝、幸子さんは無口で、緊張した顔つきでした。前回の訪問で知り合いになった雪花さんを訪ねると、雪花さんは日本語で「年をとったので、昔のことはもう忘れた」と言うのですが、それでもすがりつくような眼差しで、当時の話を聞き漏らすまいとしている幸子さんの様子が印象的でした。

納骨堂で、大勢の大谷派の僧侶が朗々とお経を唱えて法要が終わると、幸子さんは突然、日本人の遺骨が収められた壁に両手を広げてへばりついたまま、「母ちゃん、ごめんね」と繰り返し、嗚咽していました。

しばらくして振り返った幸子さんは、母と生後間もなく亡くなった弟の法要を、67 年ぶりに無事に済ませた安堵感からか、朝とは別人のように清々しく穏やかな面持ちに変わっていました。

『ハンセン病だった私は幸せ』　　金城幸子著

ボーダーインク発行

電話　098-835-2777　FAX　098-835-2840

E mail　wander@borderink.com

地下鉄工事で取り壊される台湾・楽生院

写真・八重樫信之／09年10月撮影
DAYS JAPAN 2月号に掲載

木々が伐採され、掘り起こされた園内には、土砂崩れ防止のブルーシートが至る所に見られた

工事が着々と進み、地下鉄車両の整備工場や車庫の建物が目前に迫っている

入所者の林却さん（九〇歳）。旧地区に住む。「ここは自分の家、新病棟は病室」と新病棟への転居を断っている

旧地区の診療病棟の一室。医療機材が新病棟に運び出されベットだけが残されていた。旧病棟は放置され、急速に老朽化が進んでいる

平成 20 年度　事業報告書

平成 20 年 4 月 1 日から平成 21 年 3 月 31 日まで

特定非営利活動法人　IDEA ジャパン

1. 事業の成果

（1）ハンセン病に対する差別・偏見除去のための啓発事業、（2）国内外のハンセン病患者・快復者との交流及び支援事業、（3）ハンセン病関係の資料の収集・情報提供事業、の三事業を事業計画として掲げ、取り組んだ。

（1）啓発事業

①講演、②写真展開催、③ハンセン病資料館における説明、④その他の活動の四つが主なものであった。

①講演については、森元美代治理事長が 52 回、森元美恵子理事が 2 回、行った。

②写真展については、八重樫信之理事が撮影した「絆―日本・韓国・台湾のハンセン病」の写真展を国内で 9 回、台湾の IDEA 国際集会でスライドショーを 1 回開催した。

③フィールドワーク（国立ハンセン病資料館案内）は、森元美代治理事長が 24 回案内した。

④その他の活動としては、ハンセン病問題ドキュメンタリー作品上映会に、森元理事長がコメンテーターとして参加・協力した。　08 年 5 月に東京で開催された第 4 回ハンセン病市民学会に理事長、理事、会員多数が企画段階から参加した。分科会 A「リニューアル資料館を考える」のシンポジウム開催準備や、パワーポイント製作に協力した。家族部会では、ハワイの家族会（オハナの会）の活動について紹介した。

（2）国内外のハンセン病患者・快復者との交流及び支援事業

①生活改善のための支援（交流及び支援）、②奨学金支給、の二つが主なものであった。

① IDEA 中国、IDEA インド、IDEA フィリピンへ生活改善資金を提供した。水害に見舞われたミャンマーへ、会員の並里まさ子医師を通して見舞金を送った。

09 年 2 月に森元理事長夫妻が IDEA ネパールと交流した。 3 月に台湾で開催された IDEA 国際会議に村上絢子理事が参加し、報告を行うとともに、各国からの参加者と交流を深めた。

②については、IDEA 中国、IDEA インド、IDEA フィリピン、IDEA ネパールの学生に奨学金を支給した。2009 年 2 月に森元理事長夫妻がネパールを訪問し、奨学生と面会し、学業の成果が上がっていることを確認した。

（3）ハンセン病関係の資料の収集・情報提供事業

① IDEA ジャパンのニュースレター（6 号）、②資料提供がある。

① ニュースレター 6 号では、IDEA ジャパン設立当初から国際活動に貢献され、ハンセン病市民学会東京集会の実行委員長でもあった国本衛理事が急逝されたことを悼んで、追悼文を掲載した。また 08 年 6 月に可決された「ハンセン病基本法」と療養所の将来、北京オリンピック委員会が出した「ハンセン病患者等の入国禁止措置」に対する抗議活動、インド最高裁が出した「ハンセン病患者が選挙に立候補したり、自治体に就職することを禁じたオリッサ州法は合法」という判決を紹介して、差別撤廃に向けて、さらなる啓発活動の必要性を訴えた。

② では、ソロクトの長老であった金新芽さんの追悼集を購入して、会員に提供した。

＊残部がありますので、希望者は送料込みで ¥500 を IDEA ジャパンの郵便振込口座にお振り込み下さい。その際、必ず「金新芽さんの本希望」と書いてください。

以上、平成２０年度の事業について、ご報告いたします。

会計報告（平成 20 年度）

平成 20 年４月１日から平成 21 年３月 31 日まで

＜収入＞

入会金	９人	9,000
年会費		337,000
寄付金		1,390,000
利息		851
当期収入合計 (A)		1,736,851

＜支出＞

１　事業費	
（１）啓発事業	380,716
（２）交流・支援事業	972,510
（３）情報提供事業	141,000
合計 (B)	1,494,226
２　管理費	
役員報酬	0
給料手当	180,000
消耗品費	1,293
会議費	85,232
通信運搬費	99,525
印刷製本費	88,695
雑費	7,960
合計 (C)	462,705

当期支出合計 (B+C)	1,494,226 ＋ 462,705 = 1,956,931
当期収支差額 A-(B+C)	1,736,851 -1,956,931 = - 220,080
当期繰越収支差額	1,970,642
次期繰越収支差額	– 220,080 ＋ 1,970,642 =1,750,562

会費納入のお願い！

皆様には IDEA ジャパンの活動にご理解、ご協力を賜りましてありがとうございます。おかげ様で、５年間着実に活動を続けてこられました。つきましては、今年度分の会費納入をお願い申し上げます。同封したパンフレットに振込用紙が付いていますので、それをご使用ください。今後とも、よろしくご支援ください。

理事長　　森元　美代治

★トピックス★

シンポジウム「ハンセン病はアジアをつなぐか」

IDEA ジャパン、笹川記念保健協力財団、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターの共催で、昨年 12 月 19 日にシンポジウムが開催されました。

最初に「ハンセン病問題の国際連帯に向けて」というテーマで、森元美代治理事長が基調報告を行ないました。５年間の活動について振り返り、国内での活動はもとより、ネパール、インド、フィリピン、中国、タイへの教育資金と生活改善資金を提供して、その成果が上がっていることや、2008 年３月に訪問した IDEA ネパールとの交流について、パワーポイントを使って説明しました。

続いて、中国のハンセン病快復村でボランティア活動を続けている日本人大学生のグループ（橋―チャオ）と、中国人大学生グループ（家―JIA）のリーダーによる、ボランティア活動を通して、改めて自分自身の生き方を考えたという報告は、参加者の共感を呼びました。

パネルディスカッション「ハンセン病はアジアをつなぐか」では、原田勝広さん（日経新聞編集委員）がコーディネーター、森元理事長、原田燎太郎さん（家―JIA リーダー／中国在住）、星野奈央さん（笹川財団職員）がパネリストとして討論しました。IDEA ジャパンはアジア各国から期待されている、アジアのハンセン病の現状を変えるには、同じ立場に立って交流を続けることが大事で、そうやって自立した快復者のネットワークをつくり、さらに一層国際交流を深めていけば、人権・尊厳の回復につながるのではないか、という方向性を示すことができました。

熱心な参加者でいっぱいになったシンポジウム。正面左から原田（勝）、星野、原田（燎）、森元の各氏。右は司会の西尾氏

ブックレット『絆～ハンセン病家族の国際連帯』

2009 年５月のハンセン病市民学会家族分科会には、日本、ハワイ、韓国、台湾のハンセン病の家族が集まって、充実したシンポジウム「ハンセン病家族の国際連帯」を行ないました。ハワイの家族は IDEA ジャパンが招待しました。その記録を、日本語、韓国語、中国語、英語で別々のブックレットとして出版する作業が進んでいます。家族分科会の記録を、それぞれの国で母国語で読んでいただいて、世界各国にいまだに残っている家族問題を解決する糸口にしてほしいと考えています。

この問題について関心がある方々に、ブックレット出版のご協力をお願いします。（混乱を避けるため、振替口座は、IDEA ジャパンの口座とは別にしました）

郵便振替口座
口座番号　００１６０－２－６７１９５２
口座名義　　ブックレット　絆の会

発行責任者　：森元　美代治
特定非営利活動法人 IDEA ジャパン
http://www.idea-jp.org/
事務局：
〒 204-0012　東京都清瀬市中清戸 4-847
中清戸４丁目アパート 7-605
Tel&Fax 0424-93-6105

編集後記

IDEA ジャパンが創設されて５年経ち、存在が少しずつ認められるようになったのは、うれしいことです。これからもニュースレターで活動をお知らせしなければと身が引き締まる思いです。／村上絢子

E-mail　info@idea-jp.org
FAX　04-2925-8165